

26 番目の月

木野田 博彦

3年前まで小学校の教員をしていた私は、ある時から不眠症に陥り、夜中の3時には目を覚まし机に向かつて丸付けをしたり、教材の準備をしてから出勤するというのが日課となっていました。そしてその習慣が未だに抜け切らずにいる。しかし日中の騒がしさとは対照的に、静かな明け方までの一時は、今も私にとっては大切な時間となっている。明け方前ベランダに出て夜空の星々や星座を眺めたり、中でも東の空に三日月とは逆向きの26番目の月を見つけた時は、思わず見入ってしまい心穏んでくる。

教員時代は高学年の理科を教えることが多く、中でも月の学習には自分なりに工夫してきた。だから月を見つけると嬉しくなる。しかし26番目の月は嬉しさよりも、儚さ、寂しさというものを感じる。それは間もなく消えゆく蠟燭の炎の最後の煌めきにも似ている。人の一生に例えるならば、命が燃え尽きる前の微かな心臓の鼓動、呼吸にも似ていて、切ない気持ちにもなる。そしてそれは20年前に亡くなった、父の最後の姿とも重なってくる。

私が教員になったのは、父が小学校の教員をしていたということが大きい。ただ父は私と違いハンサムで頭がよく、多才で、意志の強い人であった。しかし若い頃に肺を患い、片方の肺が機能していない状態で日常生活を送っていた。そのためか、ちよつとした風邪が原因で肺炎を併発し入院生活を送ることとなった。呼吸困難になった父は気管を切開し、チューブで直接酸素を送り込まなければ生命を維持できない状態となってしまう、それでも半年間は辛うじて会話ができた。しかし食事を喉に詰まらせたことで意識をなくした父は、その後半年間、目を覚ますことなく寝たきりとなつてしまった。私は心配で毎日仕事を早めに終え、病院に駆け付けた。奇跡を信じて、目を覚まさぬ父の顔を見つめ、酸素を送り込まれる一定リズムの機械音を聞き、心臓の拍動を示す波動曲線を見つめるばかりの日が続いた。そして天気が良ければ、帰り際、病院の屋上に立ち寄り月を眺めるようになっていた。月の神秘的な光は奇跡を起こしてくれるような気がしたからだ。しかしそんな願いも届かず、父は静かに旅立っていった。ちよつど夜明けの光で消えてゆく東の空の26番目の月のようにであった。

しばらくして父の遺品を整理していた際、父が書き残した文章が見つかった。そこには体の弱い自分がまさか3人も子供を持つことができるとは思わなかった。とても幸せを感じる。ということが綴られている文章だった。私はあらためて涙があふれてきた。

未だコロナの終息を見ない中、月は美しい光を放ってくれている。そして明け方久しぶりに26番目の月「有明の月」を見た。有明の月は微かに、でも優しく輝いていた。私は父のことを思い出し、両手を合わせた。